

西宮東高校ホール 2024年9月5日

木曜講座

カフカ『変身』を読み直す

担当者：川島 隆（京都大学教授）

1. はじめに（自己紹介と、この講座の目標）

文学作品を読む際の前提：「解釈」や「謎とき」は必要なのか？

→ 作品によっては何らかの寓意（裏の意味）が設定されている場合もある。『変身』はどうか？

2. 『変身』冒頭の一文の読み比べ

ある朝、グレゴール・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な毒虫に変わっているのを発見した。

【高橋義孝訳、新潮社、1952年】

ある朝、グレーゴル・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変わっているのを発見した。

【高橋義孝訳、新潮社、1969年】

ある朝、グレーゴル・ザムザが不安な夢から目を覚ましたところ、ベッドのなかで、自分が途方もない虫に変わっているのに気がついた。

【池内紀訳、白水社、2001年】

グレゴール・ザムザはある朝、なにやら胸騒ぐ夢がつづいて目覚めると、ベッドの中の自分が一匹のばかでかい毒虫に変わっていることに気がついた。

【山下肇・山下万里訳、岩波文庫、2004年】

ある朝、不安な夢から目を覚ますと、グレーゴル・ザムザは、自分がベッドのなかで馬鹿でかい虫に変わっているのに気がついた。

【丘沢静也訳、光文社古典新訳文庫、2007年】

グレゴール・ザムザがある朝のこと、複数の夢の反乱の果てに目を醒ますと、寝台の中で自分がばけものようなウンゲツィーフアー（生け贄にできないほど汚れた動物或いは虫）に姿を変えてしまっていることに気がついた。

【多和田葉子訳、集英社文庫、2015年】

ある朝、グレゴール・ザムザが落ち着かない夢にうなされて目覚めると、自分がベッドの中で化け物じみた図体の虫けらに姿を変えていることに気がついた。

【川島隆訳、角川文庫、2022年】

3. グレゴール・ザムザは何に変身したのか？

細部の描写はきわめて具体的だが、読者によって別々のものをイメージさせられる

- 読者の想像力ではじめて完結する描写
- 参考：「絶対に虫を描かせないで」という作者自身の要望

4. サラリーマン生活の描写と、カフカ自身の経歴

カフカ作品には、しがたないサラリーマンの生態がとてもリアルに描かれている

- 作者のカフカ自身もサラリーマン作家。ただし、本人はプラハ労働者災害保険局に勤めるエリート（保険加入する企業の業務の「危険度」を判定する専門職）

『変身』に登場するパワハラ気味の上司「業務代理人」とは、ドイツ語圏独特の制度で、対外的交渉において自企業を代表する権限を与えられた者のこと

- 未完の長編『訴訟（審判）』の主人公ヨーゼフ・Kも銀行の「業務代理人」と設定。カフカにとって感情移入しやすいポジションだった？

5. 《ひきこもり文学》としての『変身』

グレゴール・ザムザは変身がきっかけで社会生活から断絶した結果、一時的にせよ「もっと自由に息がつける」ようになる

- 生きづらさからの解放としてのひきこもり、というモチーフ
- 作者カフカ本人のひきこもり願望との関わり。恋人フェリスへの手紙で表明された、「地下室」の奥にひきこもる生活への憧れ

6. 《介護文学》としての『変身』

設定こそ超自然的だが、不自由な身体というモチーフが全編を通じて徹底的にリアルに描き出される

- 要介護状態になった人間の身体的な実感に寄り添う文学
- 社会や家庭に居場所がなくなることの恐怖。「生きるに値しない生命」は存在するのか？

変身したグレゴールの世話を一手に引き受けるのは、17歳の妹グレーテ

- 今日の「ヤングケアラー」問題に通じる描写
- 誰が介護を担当するかによって変化する、家庭の中の権力関係がリアルに描かれている
- 仕事をしながら介護をすることの苦労、介護疲れの問題も

7. 『変身』は「ハッピーエンド」なのか？

物語の最後でグレゴール・ザムザは衰弱死し、家族は郊外にピクニックに出かける

- 介護の苦労から解放された安堵をあけすけに描く。死んでゆくグレゴールからすれば、この上なく残酷な終わり方
- 妹グレーテはこの後、どうなるのか？（両親の思惑通り結婚するのか、それとも職業上のキャリアアップを果たし、自己実現をめざすのか）
- 参考：カフカと恋人フェリスの2度目の婚約の経緯について